

1-6 世界経済のしくみと現状 <基礎編>

経済のグローバル化は何をもたらすのか？

自由貿易と 保護貿易

外国との間で行われる商品取引を貿易という。貿易のあり方には、外国から輸入される商品に税金（関税）をかけず（もしくはきわめて低い税率とし）輸入量にも制限を設けない自由貿易と、高い関税をかけたり輸入量に制限を設けたりする保護貿易がある。

この違いに応じて、資源や工業力に差のある多数の国々がそれぞれ自国に得意なものを自由に輸出しあうようにすれば資源や工業力を効率よく利用することができるという考え方を自由貿易主義といい、他方、自由貿易では外国の安い商品が流入してくるために国内における同種の産業が発展しないため国内産業を保護・育成できる貿易を求める考え方を保護貿易主義という。

第二次世界大戦は、1929年の世界恐慌を克服しようとする先進国が極端な保護貿易主義（ブロック経済）に走ったことも一因となって起きた戦争だった。第二次世界大戦後の世界では、アメリカを中心とする自由貿易主義が台頭した（グローバリズム）。しかしまたそのために、世界はアメリカ経済に依存する結果にもなってしまった。21世紀に入りアメリカ経済が混乱・衰退の兆しをみせるにつれて、グローバリズムもまた見直されるようになっていく。

外国為替と 国際通貨

貿易によって輸出入された商品の代金を決済する際には、自国通貨を外国通貨に交換する必要がある。その際の通貨の交換取引のことを外国為替取引といい、その際の交換比率を外国為替相場という。

第二次世界大戦までは、金（Gold）が世界共通の通貨とされ（金本位制）、貿易の決済は金を交換することによって行われていたが、第二次世界大戦後は、同じ価値の金（Gold）との交換（兌換という）が保証されていたアメリカ通貨ドルを中心とした固定相場制になった【①】。ところが1973年にアメリカがドルと金の交換を停止したために各国は変動相場制に移行し、為替相場は日々変化するようになった。

為替相場の変動によって円の価値が高くなる（円高になる）と、外国における日本製品の価格は高くなり、逆に日本における外国製品は安くなる。従って為替相場の変化は、商品の輸出入や人の動きに影響を及ぼす。

①このころ1ドルは360円とされていた。